コンピュータは‘常に’正しいか？

資源化学研究所　助教授　　久堀　徹

20 年前、某私立大学で助手をしていた頃のことである。研究室では、98 シリーズが活躍し始めて、「パソコン」が、表計算やワープロソフトとともに様々な研究分野に浸透し始めた時期である。私がいた学部にはスポーツ専門の学科があり、インターハイで活躍した選手たちが数多く集まってきていた。この学科に入学するには、運動能力そのものが重要で、私もこの入試の手伝いをしたことがある。国内のトップクラスの運動選手が集まるのだから、日頃、机の上の仕事ばかりの私たちには新鮮な驚きの連続だった。垂直飛びで 1m20cm くらい飛び上がるバスケットボール選手や、握力計の針を簡単にくるりと回してしまうような柔道選手がいた。しかし、この試験の後は、それぞれの記録を点数化するという面倒な作業が待っていた。手書きで集めた記録を集計して、仕分けを行うわけだ。私たち理学系の助手は、表計算によるデータ処理をすでに導入していたので、手作業の点数化を非常に煩わしく感じた。そこで、この採点作業にパソコンの導入を提案したのである。理系人間にとって、作業の効率化のための当然の解決策であった。ところが、社会学を専攻していた助手が、「パソコンって、正確ですか？」と真顔で尋ねてきたのだ。理系の人はパソコンの答えを疑うことは、普通はしないと思う。しかし、この助手にとっては、パソコンはせいぜいワープロソフトを使うための道具で、計算するなど思いもよらなかったらしい。パソコンの先進ユーザーを自負していた私は、この言葉に強いショックを受けた。「これだから、文系は困るんだ」と憤りを感じたことが、今でも忘れられない。

あれから 20 年、パソコンはあらゆる分野で活躍するようになり、このような素朴な疑問を持つ人はきわめて少なくなったはずだ。しかし、文明社会の落とし穴であろうか、パソコンが正しいことを前提にしたために起こる事故は頻発している。予約していたはずのご飯が、朝起きたら炊けていない、なんてかわいいものだ。今、本学でも問題になっているエレベータの誤作動の原因のひとつは、コンピュータのプログラムミスということになっているらしい。コンピュータシステムの固まりのような大型旅客機であれば、大惨事にだってつながりかねない。皆さんの研究室でも日常的にパソコンで計算をしていると思うが、そのプログラムは本当にいつも正解を出しているのだろうか。それを疑ってみても簡単には検証できないほど、私たちの日常はパソコン頼りになり、また複雑化してしまっている。誤りのない管理という観点から、ヒューマンエラーをなくすために社会のいたるところに数多く導入されているコンピュータではあるのだが、それに頼って作り上げたシステムだけを過信しないヒューマンを養成することも、安全管理の重要な第一歩と痛感する毎日である。

2006 年 7 月バイオ研究基盤支援総合センターニュース巻頭言